

風の又三郎 宮沢賢治

どっどど どどうど どどうど どどう

あお
青あおいくるみも吹ふきとばせ

すっぱいかりんも吹ふきとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

たにがわ きし ちい がっこう
谷川の岸に小さな学校がありました。

きょうしつ ひと せいと さんねんせい いちねん ろくねん
教室はたった一つでしたが生徒は三年生がないだけで、あとは一年から六年

までみんなありました。うんどうじょう
運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろ

くり き くさ やま うんどうじょう
は栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい

みず ふ いわあな
水を噴く岩穴もあつたのです。

く がつついたち あさ あお かぜ な にっこう うんどうじょう
さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場

いっばいでした。くろ ゆきばかま ふたり いちねんせい こ
いっばいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまわって

うんどうじょう
運動場にはいって来て、まだほかにだれも来ていないのを見て、

「ほう、おら一いっとう等だぞ。一いっとう等だぞ。」とかわるがわる叫さけびながら大おおよろこびで

もん
門をはいって来たのですが、ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるで

びっくりして棒立ぼうだちになり、それから顔かおを見合みわせてぶるぶるふるえましたが、

ひとりはどうとう泣なき出だしてしまいました。というわけは、そのしんとした朝あさの

きょうしつ
教室のなかにどこから来たのか、まるで顔かおも知しらないおかしな赤あかい髪かみの子供こどもが

ひとり、いちばん前まえの机つくえにちゃんとすわっていたのです。そしてその机つくえといっ

たらまったくこの泣ないた子この自分じぶんの机つくえだったのです。